

跡見学園女子大学学芸員課程 2023年度博物館実習について

跡見学園女子大学 学芸員課程主任 教授
栗田 秀法

令和5年度の博物館実習の概要は次のとおりである。

- (1) 春学期における、通常授業時の基礎実習、一日の行程で実施する見学実習
- (2) 夏季休暇期間を中心とした学外の博物館・美術館等での学外実習
- (3) 秋学期における花蹊記念資料館を使用した事後実習

(1) 春学期における、通常授業時の基礎実習、一日の行程で実施する見学実習

見学実習は、さいたま市大宮盆栽美術館で行われた。その主たる概要は、田口文哉学芸員による館概要についてのレクチャーと展示スペースと収蔵庫の見学であった。ご多用中のご協力いただいた田口氏に心より感謝申し上げる。学芸員課程履修生にとって大変貴重な体験となった。



参加者のレポートのいくつかを以下に記しておこう。

A.U.生

博物館実習Bの見学実習でさいたま市大宮盆栽美術館を訪ねた。今回の講義では、大宮盆栽美術館の概要などの話を聞き、バックヤードを拜見した。まず、さいたま市大宮盆栽美術館はさいたま市大宮盆栽美術館条例・第一条の「盆栽に関する知識及び教養の向上を図り、盆栽文化の復興に寄与する」といった部分が今でも見返す程重視されている。そして、事業では盆栽の資料や文化に関する展示や研究、保管、収集、出版など幅広く手掛けている。講演会や広報の発行など盆栽文化に関する普及活動も行われており、それは条例の第二条に関係する。

また、この美術館は盆栽に関わる研究センターや盆栽を気軽に触れられるさいたま市の新しい拠点、盆栽に触れ親しむ、興味を持ち育てるなどのきっかけを作る盆栽産業活性化の一助をその活動の中心にしている。また、さいたま市大宮盆栽美術館では、学芸員以外にも盆栽アドバイザーや国際交流のギャラリーガイドやキャプションの英訳などを担当するCIRなど様々なスタッフによって運営されている。そして、展覧会では通常展や企画展、特別展が主である。通常展では、会場と内容によって二種の展覧会の枠組みで実施される。まず一ヶ月ごとに季節に沿った十二のテーマを展示する盆栽展がある。また、歴史と文化を中心とした盆栽クロニクルがあり、それは館内で所蔵されている資料などで紹介されている。次に、企画展や特別展では盆栽だけではなく、屋内にある和室を鑑賞場所として展示替えが行われている。

次にバックヤードでは、資料を地震で動かないように紐などで強く固定するなどの工夫が行われていた。また、環境に強いものとデリケートなものを収蔵庫ごとに分けている。デリケートな資料を保管する収蔵庫では、薬剤を使わずに人手で管理し、一か月ごとに埃の掃除をするIPMや温湿度の測定を行う。他にもすぐ展示を行えるようにマット層で版画など管理する。そして分類しやすいように付箋を用いられているが、毒性を含むのりがあるため放置しない。それはキャプションなども同じである。

さいたま市大宮盆栽美術館の長所は、盆栽といった日本特有かつ珍しいものを中心とした館である部分だと考えた。それは、

日本では盆栽に関してあまり知られていない人々に興味や知識を持つことが出来る場所であり、海外交流において日本の一つの文化を新たなリソースとしてアピールすることが出来る存在である。また、常設展でも季節ごとに様々な姿を見せる盆栽に合わせたキャプションを用意していつ訪れても見応えを感じられる。座敷から細部まで鑑賞することが可能であるだけでなく、屋外での鑑賞も可能である特殊さも強みだと考えた。短所では、盆栽は生きた植物であるため、館内に展示することは実際不向きであり、別の環境で管理する必要があるところだろう。また、展示のために他の館などから資料を借りる許可の難易度が高いところや、雪や台風などの厳しい環境下で屋外で展示を続けることが困難な時があることも考えられる。

今回のさいたま市大宮盆栽美術館では、特殊な分野を取り扱う館にいる学芸員やその他の人々がどのように運営、研究を行っているのか、バックヤードでの資料の保管の仕方の意味など、展示されている内容から影響されている人々と行動について学んだ。

Y.T.生

展示の方法を工夫することで、植物と資料を同時に展示することが出来ると知りました。卓や水石、盆器など以外に、盆栽が描かれている絵画、歴史民俗資料なども収蔵しており、バックヤードは、2段階に分けて収蔵品を保管していました。収蔵庫の手前には、あまり環境の影響を受けにくい水石、盆器、卓や盆栽の雑誌が保管され、収蔵庫では温度湿度を一定に保たれた空間で絵画が保管されていました。一度、盆栽と一緒に展示した絵画はそのまま収蔵庫には戻らず、洗浄してから戻すようです。これは、絵画に付着した汚れを収蔵庫に入れないため、紙媒体の資料に細心の注意を払っていました。さらに、盆栽はこれらの収蔵品と別で保管・培養され、学芸員とは別にいる盆栽技師が管理しているようです。

盆栽の管理では常に「枯らす＝市民の資料（金）が無くなる」という意識で取り組んでいる様子でした。雪の日は、雪で枝が折れることが無いように、定期的に雪を払い、泊まり込みで管理するようです。公的な機関であるため、市民に還元できるよう努めていることが分かりました。

また、通常展では年間36週程度展示替えを実施しているとのことで、盆栽の育成状態に合わせた展示内容になっていることも勉強になりました。クーラーがきいた部屋は、盆栽にとって良くない環境のため、あまり展示したくないという事情で、水石を使った展示を企画するなど、盆栽の短所に配慮した展示を考えることもあるということ学びました。

さらに展示物を設置するときの台やキャプションの取り付け方にも工夫がありました。展示物の見栄えをよくするために、台が大きかったりすると、設置する際に展示物に傷がつく可能性を考えて、取り外し可能であったり、キャプションは通常展の都合上、替える頻度が多く簡単につけることが出来るよう、磁石を使用していました。展示物をいかに見栄え良く、安全な環境かつ鑑賞者の妨げにならないようにするだけでなく、学芸員などが作業しやすいデザインになっていることも学びました。

A.M.生

今回さいたま市大宮盆栽美術館にて講義、バックヤードツアーを受けて今まで自分が訪れたことがある美術館や博物館と大きく異なる点が多いと感じました。

まず、今回講義でもあったように日本文化である盆栽に特化した美術館でもあり植物園でもあるという点です。相性の悪い植物と紙の資料を展示するために企画展示室を別棟に作り、収蔵庫に収蔵する掛け軸は盆栽と展示していたものは燻蒸するまでは同じ収蔵庫内に戻さないといったことに気をつけており、美術館という面と植物園という面を併せ持っているからこそその特色であると感じました。また、展示替の回数が多いということも他の美術館や博物館とは異なっていると感じました。このようなことから、植物を取り扱っているという点に配慮した展示方法や収蔵方法を行っているということがこの美術館の大きな特徴であるといえると思います。

また、この美術館の特徴として海外からの来館者が多いということが挙げられます。講義の中であったように、盆栽は世界的に人気がある日本の伝統産業であり、大宮盆栽村(さいたま市北区盆栽町)は盆栽の愛好家にとって世界的に有名な場所です。このようなことから大宮盆栽美術館には多くの多くの外国人観光客が訪れています。実際に私たちが見学した際にも館内を見学している観光客の方々を見ることができました。展示のパネルやキャプションには日本語だけでなく英語での説明が書かれており、ホームページには中国・韓国・朝鮮語のページが用意されています。それだけでなくさいたま国際盆栽アカデミーに外国人向けのコースを設立し、ミュージアムサポーターによる多言語ガイド、海外施設との連携事業といったことを行っていることから、国際化の進んでいる美術館であると感じることができました。

展示方法や収蔵方法の工夫、国際化の進んでいるという点がこの美術館の長所であると感じました。その他の長所としては土呂駅からのアクセスが非常に便利であり、駅に地図が表示されていたため初めて訪れる人も行きやすいのではないかと感じました。しかし、バックヤードツアーでお話があったように収蔵方法にまだ若干問題が残っているという点は短所であると感じました。

また、館内のトイレの個数が少なく混雑している場合は待ち時間が長くなってしまったと思います。外にもトイレがありました。少し分かりづらい場所にあったと感じました。

今回の見学実習で美術館と植物園といった面を併せ持つ大宮盆栽美術館は国内外問わず様々な人が来館し、日本の伝統産業である盆栽について学ぶことができる美術館であると感じました。特に普及事業の多さや国際化が進んでいることがこの美術館の長所であると思いました。

K.K.生

博物館の見学先が大宮盆栽美術館と聞いた際に、初めて盆栽専門の美術館があることを知った。

今まで博物館の授業で学んできたことから考えると、今回の講義の前に先生と田口さんも言っていたように、土や虫がつく植物と資料は相性が悪く、同じ館内で所蔵し、展示するということではできないのではないかと考えていたため、どのような施設で資料を管理しているのか、どのような形で展示しているのか気がなった。

このことについては、講義内での施設についての説明の際に詳しく対策について話を聞くことができた。まず一つは、盆栽と紙などの資料は一緒に展示室では展示しないということだった。盆栽美術館では盆栽に関わる浮世絵なども多く収蔵しており、紙の資料を展示したいときは、盆栽が展示されるコレクションギャラリーとは棟を分けた、企画展示室で展示を行っており、この企画展示室には盆栽は一切入れないという、徹底した管理が行われていることがわかった。また、一度盆栽と一緒に展示した資料は、資料の収蔵庫に戻す際に、燻蒸をしてから収蔵庫に戻すということで、ここでも徹底した管理を行なっていることがわかった。

展示についての説明では、盆栽美術館で所蔵している盆栽は、美術品として登録されているものだけでも127点もあり、美術品以外の盆栽も含めると500点ほどもあるというが、これらを枯らしてしまうとかなり大事になるということで、盆栽にはかなり気を使って管理をしていることがわかった。

盆栽の正式な鑑賞場所は屋内だが、植物としては屋外管理が基本ということで、ずっと展示室に置いておくのは盆栽の生育には良くないため、1年間で1ヶ月ごと12のテーマを設け、年間で36週程度展示替えを実施している。また、夏場は冷房の効いた室内にはなるべく盆栽は置きたくないということから、室内の展示には水石などを主な資料として展示するなどして、盆栽を飾らなくても済むような展示構成を考えるなど、工夫をして盆栽に適した環境で展示を行えるようにしていた。そして、雪や台風などの時には閉館後の夜も館に2人ほどの学芸員が泊まり込みで残り、1時間ごとに盆栽に積もった雪を落とすなどして、盆栽の様子を見て回っているということを知り、展示替えのことなども含め、この館の学芸員さんたちの仕事量は他の博物館・美術館と比べるとなかなか多いのではないかと考えた。それだけ盆栽は管理をするのが大変だということではないかと考えた。

そして、実際に盆栽美術館へ行って見て、お客さんは外国人とご年配の人が多く、特に外国人の方で一人で来て、写真を撮りに撮っている若い女性が多いことが印象的だった。盆栽が外国人に人気ということは知っていたが、実際に興味を示している様子を見たり、近頃は盆栽を見にくる外国人観光客はもちろん、盆栽の飾り方を学びにくる外国人も多くなっているということを知り、かなり熱心な関心を寄せている方が多いことがわかった。美術館側もこの外国人の方達に応えようと、C I Rの方を中心として英語でのギャラリートークの開催や、展示では日本語のキャプションと同じ大きさでの英語のキャプションの設置や、Facebookでの積極的な情報発信などを行なっているということだった。さらに、アメリカの国立盆栽・盆景園との姉妹館提携も行なっており、国際化に力を入れていると感じた。これからコロナも明けてさらに外国人観光客が増加してくると思うため、さらに国際化の活動が盛り上がっていくのではないかと考えた。

(2) 夏期休暇期間を中心とした学外の博物館・美術館等での学外実習

Y.O.生

①学修の概要

「神奈川県立歴史博物館」(以下、「神奈川県博」と表記する)は、神奈川県内の文化や歴史を総合的に展示されている博物館である。神奈川県博の建物の旧館部分は、1904年(明治37年)に旧横浜銀行の本店として建てられた当初の建築用式が残っており、国の重要文化財にも指定されている。そのため、旧館部分の建物も、展示しているものの一つとして保管されている。

神奈川県博の実習で行われた作業の多くは、博物館資料の扱い方に関する事であった。扱った博物館資料は大きく分けて、「歴史」「民俗」「美術」「考古」の4つの資料を扱った。中でも、ひときわ苦労したのが考古資料の梱包作業だ。考古資

料は、当時、実際に使われていた事が証明できるものの一つとして成りうる事があるため、「梱包する際、割れてしまわないのだろうか」という不安な気持ちを抱えていた。しかし、そんな中、アシスタントとしてついていた職員から、「資料を扱う時に、緊張感を持つことができているのは、非常に良いことなので、今後の実習もその気持ちを忘れないようにして下さい。」というアドバイスをいただいた。私は、そのアドバイスのもと、引き続き梱包作業に取り掛かり、最終的には資料を壊すことなく、無事に梱包作業を終えることができた。

実習最終日には、「教育普及の実践」として、主に小学生を対象とした模擬展示を行った。模擬展示では、「江戸時代に使われていた旅道具」をテーマに、各グループで展示企画を考案し、その内容を職員や他チームの前で発表及び展示を行った。私が所属するグループでは、展示タイトルを「旅行のお供達」として、江戸時代の旅行で使われていた便利な道具について知っていただくことを目的とした展示内容にした。ワークシートや展示に使うキャプションの内容は、読み手側の心理に寄り添ったものにし、モノ自体の配置も、万が一、列ができた際にも鑑賞しやすいよう斜めに置くようにした。

他チームからの講評では、「来館者に問いかける形のキャプションは、親しみやすさを感じた」「展示に使われている地図の配置に躍動感があった」などの高い評価をいただいた一方、職員からは、「斜めの配置には、立ち位置によっては、見やすさに差が出る」と言った旨の講評をいただいた。

この模擬展示を通して、私は館内に置かれている展示品は、ただモノを置くのではなく、館内のゾーニングを把握した上で、人の動線にも着目して構成されている事を学んだ。常に来館者を配慮し、置いてきぼりにさせないようにする心構えは、今後も様々な場面で生かしていきたい。

②実習でもっとも勉強になったこと

実習の中で、もっとも勉強になった事は、博物館内の保存環境を完璧な状態に保つには限界があることだ。保存環境のパートでは、各チームで館内を見学しながら、専用のワークシートに神奈川県博の保存環境の問題点とその改善策を挙げ、話し合いを行った。

私が所属するチームでは、「他の展示室と比べて、中世のブースのみが一際寒い」「出入口付近にある赤いじゅうたんには、埃がたくさん付いているので、掃除の方がいい」といった問題点を挙げた。これに対して、保存環境を担当した職員によると、温湿度について、「温湿度の問題については、温暖化の関係で室内の温度をコントロールすることが難しい。」との事で、「館内の温湿度は、自分が展示室にいて、しんどいと思っていなければ、良好であるとみなして良い」とのフィードバックがあった。

また、赤いじゅうたんについている埃については、「出入口付近で掃除をすると、外に繋がっている関係で、掃除する過程で埃が舞うことによって、その埃が資料や作品につく事がある。埃には、害虫や水分が含まれているため、放置すると、カビが生える可能性や触んでしまう危険がある。」というフィードバックがあった。この事から、私は博物館の保存環境を完璧な状態で維持し続ける事の難しさを知った。神奈川県博は、先述したように、建物の一部が国の重要文化財に指定されている関係上、予算以外にも、保存環境の面においても、一般的な博物館とは、できる事が若干限られているのが現状である。しかしながら、そのような限られた状況の中でも、両立を図るために、様々な工夫を凝らして行われているという事を改めて知る事ができた。



H.K.生

①学修の概要

「目黒区美術館」は1987年に開館し、以降地域の身近な美術館として展覧会だけでなく、ワークショップなど様々な教育普及活動に力を入れている美術館です。そのため、私が目黒区美術館で行った実習もそのほとんどがワークショップ関連でした。

目黒区美術館の特徴の一つに、一年を通じて博物館実習を行うというものがあります。6月から始まり11月の最終日までであり、自身の予定に合わせて参加する日を選ぶことができました。

夏は夏休み期間中に行われるワークショップの準備、開催後の手伝いを行いました。今回は「画材の実験室」という、その時開催されている展覧会に関連した画材や素材、技法を用いて絵を描いてみるという趣旨のものでした。事前準備では、もみ紙という技法を使う際、どの画材を使うと出来上がりはどのようになるか、まさしく実験のように様々なものを試し、当日参加される方々に説明ができるようにし、ワークショップが開催されるまで多くの試行錯誤があることを知りました。本番のワークショップでの参加者は子どもが多く、その対応の仕方が難しくもありましたが、学芸員さんの助力もあり、初めてのことながらも無事に終えることができました。

ワークショップが終わると、美術館の収蔵庫を見たり、実際に作品を取り扱って作品カードの記入などの実技を行ったり、美術館の事務の方のお話を聞いたりといった実習を行いました。収蔵庫では作品の収納方法や運搬作業の仕方を実際に見学しながら学び、作品の取り扱いも丁寧に教えていただきました。大学で事前に学んでいたことではありましたが、やはり実際にしてみると違って非常に良い経験となりました。

今回の実習で他の博物館とは違うことができたのではないかと特に感じたのは最終日のプログラムです。美術館が抱える問題を四つ提示され、その問題について事前に考え、実習生のみんなと話し合っただけで美術館の未来について考えるという内容のものでした。様々な問題を抱えていると知りながらも深くは考えてこなかったことを自分なりに考え、発表する機会は自身の今後の美術館との向き合い方も考えさせられるものとなりました。

②実習で最も勉強になったこと

実習を通して多くのことを学びましたが、特に私が勉強になったと感じたことの一つとして、ワークショップを準備から開催までできたことをあげたいと思います。博物館において教育普及活動は今後さらに重要視され、そういった機会は増えていくはずです。その体験をできただけでも十分学びのあることでしたが、それだけでなく教育活動において避けては通れない子どもとの接し方について私は新たに学ぶことができました。私がワークショップにて一番危惧していたことが子どもとの接し方だったのですが、その旨を学芸員さんに話した際に、「ただこうしようと指示するのではなく、あくまで子どもの自由に、好きなことをしてもらい、普段はできない体験を楽しんでもらう」のだとアドバイスをいただきました。上手いかわからない場面も多少はあったものの、このアドバイスがきっかけで「まずは楽しんでもらう」という前提に気付きました。ワークショップのテーマ決めや準備はもちろん良い経験でしたが、子どもとの接し方ないし来館者の方々への心意気というようなものを勉強できたと感じます。

次に、最終日のプログラムだった美術館の問題点について考え、意見交換をする機会は貴重な経験、学びの場となったと考えます。自分では思い付かなかった意見や、新しい知見を広めることのできた時間となり、美術館についてさらに理解が深まったような気がします。そして、美術館の問題はすぐに解決できるようなものではなく、多くの問題が絡み合っただけでできていることも知りました。今私たちができることは何かといった問題提起から、学芸員の役割というものにも深く言及していただき、非常に多くのことを学ぶ機会に恵まれました。



K.I.生

①学修の内容

練馬区立美術館にて、五日間の実習をさせて頂きました。実習の中では、美術館についての講義や見学と、作品の取り扱い、実際に作品の調査等の実務的な部分も体験させて頂きました。最終二日間には、教育普及事業と練馬区立美術館のコレクション展を企画すると仮定した展示を個人でそれぞれ考え、発表を行いました。

美術館の現状や課題についての講義を館長の伊東さんからお話いただき、その後美術館を運営する側が利用する施設内の普段見えない部分を、美術館だけでなくふるさと文化館も併せて見せて頂くなどの貴重な機会を頂きました。美術館としてあるだけでなく、施設的な部分からも現実的な問題を抱えていることを、実際に見学させていただくことで体感することができ、考えるきっかけとなりました。作品の調査では、練馬区立美術館に収蔵されている竹原嘲風のスケッチブックの中身の調査を行い、写真の撮影と調書へのスケッチを行いました。スケッチブックであったことから、制作年が書かれている事で製作者の動向が見えてきたり、ものの大きさや綴じ方から旅行先に持って行ったものではないかもしれないというように、調査をすることはコンディションを見るだけでなく、調査したものの中身から製作者がどのようにしていたのかの予想を立てる事ができる等、物の状態を見るだけではないという事は非常に興味深く、印象的でありました。教育普及事業について、その取り組みについてのお話を聞いた後、実際に美術館の展示会の関連事業を考え発表を行いました。練馬区立美術館の教育普及活動では、美術を使った学びの場の提供と、美術への敷居を下げるのではなく多様な入口を作るといった工夫がなされ、考えを広げられる場の提供、学びのきっかけとなる活動が行われており、美術館がどのように教育活動をするとう有効的であるのかを勉強させて頂くことができました。発表においては何を行うのかという内容部分だけでなく、開催する側が実際に何を考えなければならないのかという部分を学ぶ事もできる機会でもありました。最終日に行ったコレクション展の企画では、展示会開催概要と出品リスト、展示プランを作成し、企画内容の発表を行いました。展示のテーマや開催概要といった内容部分を決めるために自分で収蔵品から作品を選択し、一から企画をするという体験を行いました。それらを学芸員の皆様にフィードバックして頂き、実際に展示企画をしている方々からの視点で足りない部分等を教えていただくことで、展示の内容に一貫性を持たせるテーマを考える難しさや、他の実習生も同じ収蔵品から作品を選択している中でも皆それぞれ視点が違うことで、工夫次第で多様な展示を行う事ができる事も分かり、多くの学びがありました。

②実習で最も勉強になったこと

実習を通し、受け手側では見ることのできない美術館の活躍について、美術館の持つ役割についてもより深く学ばせて頂きました。展示を考え、人々に見てもらうために必要な具体的なテーマや伝えたい事を考える難しさや、実際に展示室へどのように構成していけばいいのかというような展示を考える際に必要なものの多さなど、展示を作ることの難しさについてを、コレクション展を考え発表することで学ぶ事ができました。展示についての工夫だけでなく、教育普及事業を併せていく事で人々が自主的に学ぶ事を促進させる事ができ、美術館の教育普及活動には美術を目的とするのではなく、手段として扱うことで学びの場として発展させる事ができるなど、展示以外の部分にも重要性を持つことを学びました。そしてこれらを有効な活動にし美術館をよりよく運営するためには、美術の専門的知識があるだけではなく、多様なものに目を向けていかなければならないという事も、想像していたよりも学芸員に求められるものである事を学びました。

Y.M.生

①学修の概要

「流山市立博物館（以下博物館と表記する）」は明治時代に葛飾県庁、印旛県庁がおかれた場所であり、もともとは駿河の国、田中藩本多家のお屋敷があった場所にあり、現在は図書館と建物を共有している。埴輪や土器、農機具、流山の名産である「みりん」の製造道具などが展示されており、そのほかにも流山の歴史や新選組の資料（流山は近藤勇の新選組最期の陣営地である）、初代利根運河ピリケンさんなどが展示されている。流山市には遺跡も多く、市での発掘を行っている場所はその当時なかったのだが、市内で行われていた千葉県が行っている発掘現場の見学もさせて頂きました。

また、千葉県および流山市には関東ローム層をはじめとしたわかりやすく有名な地層も存在する。博物館にも地表の剥ぎ取りをされたものが展示されている。今回の実習ではその体験をさせて頂いた。直射日光の下での労働作業であったため体調不良になってしまうメンバーもいたものの、無事にその日の作業は終了。午前と午後に分けての作業だったが、それでも特殊な薬剤などを利用して剥ぎ取った地層を乾燥させる程度しか進まなかった。その他にも、市内で発掘された土器の破片などを洗ってみると子供教室の監督、かつ翌日にはその時に子供たちが洗った土器の破片にそれぞれ分けられた箱ごとの発掘場所と番号を細い筆と白いクリームで書いていく、という作業を近隣の小学校の一室に設けられた部屋にて行った。土器の破片から、左

右上下表裏を読み取り、裏面の下の方に書かねばならないため、小さく細く書くということよりもそちらの方に神経を使う必要があった。さて、始めに述べた地層を剥ぎ取ったものは、余分な土を洗い流さなければならない。それらは水とブラシなどで労働作業であり、かなり力と体力の必要だった。さらに、展示室の一部を利用し、実習生たちが自分たちでテーマから展示品、キャプション、設置を行った。作業はギリギリまでかかったが、無事に期限までに終わらせることができた。全体の最終日には展示室のリニューアル案をそれぞれ発表した。リニューアル案であるため、私は他の人々とは違い、あくまでも「金銭面は考慮せず」の考えを発表した。とはいえ建て替えてはならないため空間は変わらずできるであろうリニューアル案だ。いくつかの案を発表したが、そのうちのひとつが職員の方々にも良い反応を頂けた。それが、一部展示スペースで奥行きのある場所があったのだが、その奥の展示品が遠くよく見えなかったため、そのひろいスペースの中に通路を作り、狭くはなるものの両端に展示を置くことができるようになり、遠くで展示品が見えないということはなくなる、というものだ。展示品自体も大きくはないものも多いためできそうだが、そのような思考はなかった、とお褒めの言葉を頂いたのが嬉しかった記憶がある。

また、私は初日に病欠してしまったため後日補修として一日多く、戦国時代の足輕の鎧を着てみよう、という子供教室の監督、また、流山市に残る古い蔵の建て替えのための解体現場の見学もさせて頂けた。実際の蔵の作りや、どのように建てられていたのか、などを実際に見て確認することができた。

②実習でもっとも勉強になったこと

実習以前の授業でも博物館で行っていることなどは学んでいたが、それ以上に博物館ごとの特色を読み取るということが学芸員など職員には必要だということだ。今回実習生として受け入れていただいた流山市立博物館は、私が今まで見学に行ったことのある他の博物館等よりも「キャプション<資料」という思考が強いのだという。そのため展示室のキャプションには説明はほとんどなく、資料の最低限の情報（名前や産地、時代など）のみであることも多く、どのようなものなのか、と書くことは書いていない展示品も多い。とはいえ、やはり展示を作るうえで「あれも伝えたい、これも伝えたい」となってしまう、キャプション量も多くなりがちだ。私たちが展示を作る際にもそうなってしまう、結局総評の際に「やはり説明が多いね」と言われてしまった。だが一方、大学で行った資料館での模擬展示では、先生方から300字程度で、というアドバイスを頂いた。それも、展示自体や、ブースの説明だけではなく、ほぼすべての展示品にキャプションを付ける必要がある。展示品自体の必要最低限の情報しかなかった流山市立博物館とは違うだろう。これはやはり、その博物館ごとの性格によるものなのだと考えられる。博物館のはじめからそこに務めている、などであればその当時の学芸員のやり方でもあるのだろう。しかし、これからの時代途中からその博物館に務めるという方が多いはずだ。以前にアルバイトなどでも別の場所で働いていた、などの経験があったとしても、それがその博物館で通用するかはわからない、ということだ。それまで、当然博物館ごとの性格があるのだろう、とすることは頭では理解していた。しかし実際に体験することによって、想像よりも顕著であり、それぞれにそれぞれの考えがあつてのことだと知ることができた。



貝塚部分の地層の剥ぎ取り。博物館の学芸員が主導し作成したものを近隣の小学校の廊下に展示しているもの



子供教室で洗浄した土器等の破片に文字を記入したもの

(3) 秋学期における花蹊記念資料館を使用した事後実習

秋学期の授業は、花蹊記念資料館を使った模擬展示の企画立案の作業が主たる内容となる。履修者は、歴史・民俗班、美術班に分かれて企画案を練り上げ、卒業論文の執筆と並行して厳しいスケジュールの中で準備を進め、開会に間に合わせていった。

博物館実習生模擬展示

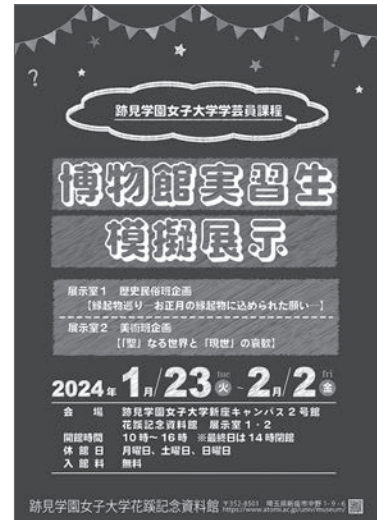
歴史民俗班企画

「縁起物巡り—お正月の縁起物に込められた願い—」

美術班企画

「『聖』なる世界と『現世』の哀歓」

会期	2024年1月23日(火)～2月2日(金)
会場	跡見学園女子大学花菱記念資料館 展示室1・2
開催時間	10:00～16:00
休館日	土曜日、日曜日、月曜日
主催	跡見学園女子大学学芸課程
入館者数	95名



展示室1

歴史民俗班企画「縁起物巡り—お正月の縁起物に込められた願い—」

担当学生名 岩元、大櫛、木村、坪内、間、松崎、松延、渡邊

【展示概要】

皆様は今年のお正月はどのように過ごしていましたか。多くの方々は、おせちやお雑煮を食べ、門松や鏡餅等を飾り、中には初詣に行かれた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。お正月はその年の五穀豊穡や家内安全等をもたらす「年神様」を迎える年中行事として、古くから人々の間で大切に行われてきました。

現在においても、様々な風習が受け継がれていますが、お正月になると毎年当たり前のように行っていたことには、それぞれ意味があります。

例えば、「門松」は年神様が迷わずに家に来てもらうための目印として飾り、おせち料理は、めでたさを重ねるという意味から「重箱」を使い、その料理も食材ごとにそれぞれ意味が込められました。その一つである「昆布巻」は、喜ぶに通じる食べ物とされています。このようなものは全て「縁起物」と呼ばれており、お正月は「縁起物」であふれています。

本展は「飾る」「遊ぶ」「食べる」「体験する」という4つの視点から、お正月に関わる様々な縁起物を展示し、それぞれどのような意味があるのかを探っていきます。そしてこれらを知っていただくことにより、皆様のすくすくお正月の時間が、少しでも豊かなものになれば幸いです。



展示室2

美術班企画「『聖』なる世界と『現世』の哀歎」

担当学生名 石田、宇田、小山、権田、田尻、馬渡、持尾

【展示概要】

ギリシャ時代より絵画は神への捧げものとして神殿に描かれるようになりますが、キリスト教においてもその教義やイエスの生涯を視覚的なイメージで伝達できるメディアとして重要視されました。同様にアジアにおいても仏教や神道の教義を伝えるため絵画などの視覚イメージを取り入れてきました。

一方で、近世から近代に時代が下ると、絵画は教会や寺院のみならず、広く社会に浸透するようになります。そのため、絵画はこれまでの「聖」なる世界から解放され、社会と密接に結びつくこととなりました。そしてそれらの作品はそれが生み出された時代の諸相を色濃く反映するようになりました。

この展覧会では絵画や建築を中心に、中世に生み出された「聖」なる世界と近世から近代に至る「現世の「哀歎」」をそれぞれの作品が生まれた時代背景を通じて紹介します。

